

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース⑨ *

谷口 和久

伝統的な人形問屋の並ぶ大阪・松屋町筋。この町の一角に、日本では珍しい欧州のヴィンテージ自転車を並べるギャラリー「BI・CI・CLASSICA」があります。

オーナーはミラノ出身のルイージ・ヴェラーティさん。本業は建築家ですが、若い頃はイタリアのアマチュア・カテゴリーで自転車レーサーとして活躍され、その後ミラノ国立芸術学院を卒業し、1986年に日本に來日。2009年には本業の傍ら、趣味が高じて建築事務所の1階を改装し、ヴィンテージ・ロード・ギャラリー「BI・CI・CLASSICA」をオープン。今年に入ってからオリジナルフレームをプロデュースするという熱の入りがよう。

今回はそんなヴェラーティさんを松屋町のギャラリーにたずね、イタリアのレース事情、ヴィンテージ車の魅力についてお話を聞いてきました。ちなみに、ヴェラーティさんは流ちょうな日本語(しかも関西弁!)を話されます。



【「BI・CI・CLASSICA」の店頭】

谷口(以下 T): 自転車を始められたきっかけは? ヴェラーティ(以下 V): 始めたのは13歳から。私が始める前に先にお兄さんが始めていたんだけど、私もとてもやりたくて、お父さんに1年くらいお願いして。自転車自体、高いものだからね、特にロードバイクは。そうそう簡単に手に入るものではなかったし。

T: イタリアでもそうなんですか?

V: 普通の自転車屋さんでは売ってないです。それで、1年くらいお願いし続けて、お兄さんがまた新しい自転車を買う時に一緒に付いて行って、中古の自転車を買ってもらったんです。

T: イタリアの男の子は、サッカーか自転車かだと思いますが、自転車を選んだ理由は?

V: もちろんサッカーはイタリア人みんなやっていますよ。好き嫌いは別にして。やらなきゃいけないこと、流れるには(笑)。サッカーならどこでもできるし、お金もかからないし、一番ポピュラーなスポーツですよ。服もいらぬし、ボールがあればできるし。なんで自転車かという、お父さんが自転車好きだったから。さらにさかのぼると、私のおじいさんが自転車選手だったらいい。会ったことはないんだけど。

T: プロだったのですか?

V: いいえ、プロではなかった。お父さんが子供の頃、自転車選手になりたいという夢があって、でもおじいさんが若い時に事故で亡くなったから、お父さんが家業を継がなければならなくなった。だから自転車どころではなくなったけど、やりたい気

持ちは残っていて、それが私にまで伝わったんだね。

T: ヴェラーティさんはミラノご出身ですが、あのあたりは自転車が盛んですよね？

V: 走っている人も多いしね。イタリアでたぶん一番盛んなんじゃないかな。

T: レースにはどんな形で参加されていたんですか？地元のクラブに所属するとか？

V: 絶対チームに入らないとダメ。なぜならレースに出るにはライセンスが必要になります。事前に病院で健康診断も受けなければいけないし。レースは(体にとって)軽いものじゃないからね。そんなに詳しいチェックではなかったけど。それでOKが出たらチームが申請手続きをしてくれて、ライセンス・カードが手に入ります。それがないと走れないんです。勝手に行って「私、今日このレースに出ます」っていうのはできない。チームに入って、年齢別カテゴリーのレベルをクリアしていき、最終的に実力のある人はプロになる。言い換えれば、このルートに乗らないとプロにはなれない。

T: 普段の練習はチームで？それとも一人で？

V: 基本は一人でしたね。普段は学校があったし。私の行っていた学校は終わりが遅かったから、練習の時間を取るのが難しかった。でも夏休みにはみんなと一緒に練習。イタリアの夏休みは長いしね。楽しい練習♪



【優勝を飾った若き日のヴェラーティさん】

T: 厳しくなかったんですか？

V: いや、楽しいところと厳しいところ、両方あったね(笑)。厳しいのは水曜。

T: そういう練習のサイクルがあるんですね。

V: そう、月曜が軽く、水曜が重く、金曜が中ぐらい。そして、日曜がレース。毎週レース。

T: 毎週ですか？！

V: そう、毎週レース。3月か4月から10月まで。

T: プロと変わらないですね。

V: プロはもっと！1週間に2回くらいレースやるし。まったく世界が違う。13歳で始めて、18歳でやめたけど、18がリミットだね。

T: それはプロになるかどうかの？

V: いや、その前に「自転車をちゃんとやるかどうか」の。プロになるかどうかはまた別。

T: ちゃんとやる、という、フルタイムのレーサーになるということでしょうか？

V: そう、ほとんどプロに近いものになるけど。(自転車かそれ以外か)どっちに軸足を置くか、将来のことを考えて決めないと、どっちも中途半端になってしまう。たいていやめるのも、この頃。

T: ほとんどの人はそこであきらめるんですね。

V: あきらめちゃう人が多いですね。それか、超いがかげんでやっちゃうか(笑)。

T: なるほど(笑)。

V: 勉強もいがかげんで、仕事もいがかげんで、自転車もいがかげん(笑)。あと、もう一つの問題は、自転車は厳しい世界で、遊びが許されないから、それがたぶん(自転車をやめる)一番大きい理由。日曜はレースで遊びに行けないし、土曜もレースを翌日に控えているから遊びに行けないし。レース出たら、もう疲れ果てて遊びに行けないし。女の子と付き合うこともなかなかできない(笑)。厳しいよね、若い時に。周りの友達が楽しんでいるのをはたで見ながら、自分だけ一生懸命走って(笑)。その点ではサッカーより厳しいかもね。

T: その頃の仲間で、のちに有名になった人はいますか？

V: いますね。でも、プロになった人は私の周りでは少ないですね、4人か5人くらい。

T: そういう人たちはチームの中でも強かった？

V: 強かったですねえ。中でも超有名なのはジャンニ・ブーニョ。[注: 1990年ジロ・ディ・イタリア総合優勝、1991・1992世界選手権2連覇、90年代のイタリアを代表する選手]

T: ブーニョと同じチームだったんですか？！

V: カテゴリーが違ったけどね。彼は私より、2つか3つ若かったから。[注: イタリアでは10代の間は2歳刻みでカテゴリーが分けられている] あと、同じチームではなかったけど、一緒によく走ったのはギド・

ボンテンピ。彼はあり得ない人間だったね。わかりやすく言うと、私が普通電車、彼が新幹線(笑)。体もでかかったし、めちゃくちゃパワーがあった。あとは、アドリアーノ・バッフィ。彼は一緒に走っていた頃はそんなに強くなかったけど、プロになってから強くなった。アマチュアで強くても、プロになってから落ちる人、多いですよ。でも逆もありますよ。アマチュアでそこそこでも、プロになってから結果を出す人も多いですね。アマチュアとプロはまったく違うからね、プロは200キロ走ってから、そこからさらにどういう走りをするかが大事なところ。アマチュアはせいぜい130~150キロくらいだからね。その差が全然違うし。ブーニョはアマチュアの時からずっと強かった、1年目から強かったですよ。彼はフィジカルが強い。メンタルは微妙なところがあったけど。



【Maglia Rosa を身にまとったジャンニ・ブーニョ】

T: 難しい性格ということ？ それともおとなしかったのですか？

V: おとなしかったですね。自分の世界を持っていると言えればいいかな。毎週水曜か木曜に集まって、打合せするんですよ。その時もブーニョさんは腕組みして、いつも一人で、あんまり人としゃべらなかつたし。(ブーニョの)実家が近所でクリーニング屋さんをやっていたので、私が自転車やめた後もいろいろ話聞いていたんだけど、はじめはやめたかったみたいです。

T: プロを？ あれほど強かったブーニョが？！

V: そう、プロは難しいんですよ、仕事だからね。彼が初めて勝ったレース時のことだけど、もともと彼はしゃべりが得意じゃないというのもあって、インタビューで全然しゃべらなかつたの。そうしたら、スポンサーから文句が来たらしいよ。「お前は勝っても負けても一緒や！」って(笑)。

T: え～、そんなことまで言われるんですか！

V: 厳しいよ(笑)。ただ勝てばいいというもんじゃないね。単に強い弱い世界ではないんです。

T: 自転車はチームプレーだから、コミュニケーションの問題って大きいと思うんですけど、ブーニョはその点では問題はなかつたのでしょうか？

V: 結果的には、あれだけの成績を残したということは、うまくいったんでしょう。でも、彼本来の力からしたら、(勝ち数は)少なすぎる。フィジカル面は素晴らしかったけど、メンタル面がうまくいってなかつたんだろうね、チャンピオンとしての。

T: たとえばランス・アームストロング [注: ツール7連覇を達成した今世紀最強のレーサー] が持っていたようなメンタリティがブーニョには欠けていた？

V: そう、マッチョじゃないと厳しいですよ。デリケートであることは絶対プラスにならない。あんまりあれこれ考えすぎたらダメ。私も考えすぎるタイプだから、、、、なんとなくわかりますね。

T: ヴェラーティさんは山岳か平地か、どちらが得意でしたか？

V: どっちもやね、混ざっている方が好きだったかな。でも、スプリント [注: ゴール前で大人数で競り合うこと、プロは最高速が70km/hにも達する] が弱かつた。弱かつたというか、練習の時は強かつたんだけど、レースの時は全然ダメ。

T: レースの時のスプリントはやっぱり怖かつた？

V: 怖いよ！！もう、ありえないくらい怖いですよ。

V: ひどいケガをされたことはありましたか？

T: 何回も病院行ったことありますけどね。やっぱり危険ですよ。私が初めて買った自転車はビアンキだったんですけど、それも大事故で壊してしまつたんですよ。泣きましたよ。

T: それほどの大事故なら、その時もケガを？

V: いや、その時は幸いケガはなかつたんです。倒れて折り重なった人の山に、最後に乗り上げたから(笑)。私の現役最後のレースも(その事故と)同じコースであって、同じ場所で同じような事故が起きていました(笑)。

(この項10月号に続く)

<取材協力>

ヴィンテージ・ロード・ギャラリー「BI・CI・CLASSICA」

大阪市中央区瓦屋町 1-10-7

(当館スタッフ)

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第7回

堤 康德

福島県の農家から、高濃度の放射性セシウムを含む餌の稲わらを食べた肉牛が出荷されていた。農水省と県は、牧草については4月下旬に検査をしていたが、稲わらはチェックしていなかった。乳用牛は大丈夫なのだろうか？ それにしても、この間の抜けた検査体制に驚かされる。チェルノブイリの教訓が活かされていないのではないか。

1986年4月26日に起きたチェルノブイリの原発事故によって、ヨーロッパの周辺国も放射能で汚染された。各国の対応にはばらつきがあったが、イタリアでは、事故現場から約2000kmも離れているにもかかわらず、ヨーロッパのなかで最も厳しい措置がとられた。朝日新聞日曜版グローブ(2011年7月3日付)に掲載された平田篤央氏の記事「イタリア『脱原発』源流に25年前の経験」によれば、「5月2日に、保健省が野菜の販売を差し止め、15日にわたって青果市場を閉鎖。さらに、10歳以下の子供と妊婦には22日間、生乳の摂取を禁止した」。

当時私は、フィレンツェ大学文学部に留学中だった。フィレンツェの市場からも、野菜が消えたこと、とくに旬のアスパラガスを食べられずに残念な思いをしたことをよくおぼえている。もうひとつ思い出すのは、『レプブリカ』紙が皮肉まじりに掲載した1枚の写真だ。そこには、日本の税関で、イタリア産スパゲッティにガイガーカウンターを当てる検査官が写っていた。

ツクシのようにひよろひよろの缶詰のアスパラガスしか食べたことのない私にとって、ヴェネト州バッサーノ・デル・グラッパ産の白くて太いアスパラガスは衝撃だった。1986年の5月、そのアスパラが食べられなかったのである。グラッパ山の麓にあって、プレнта川の清流にパッラーディオの設計した木の橋のかかる町、バッサーノ・デル・グラッパ。私は、実際に渡ったことのあるヨー

ロッパの橋のなかで、この橋が、プラハのカレル橋とともに、最も美しいと思う。もちろんここは、葡萄の蒸留酒グラッパの名産地でもある。

福島原発事故のあと、関東産のピーマンやパセリからも、放射性物質が検出された。そのニュースを聞いたのは、ちょうど、久しぶりに夕食にスパゲッティ・アッレ・ヴォンゴレを作ろうかと思っていた日だった。いうまでもなく、パセリはイタリア料理に欠かせない香草のひとつだ。魚料理には、バジリコではなくパセリを使う。パセリが入っていないスパゲッティ・アッレ・ヴォンゴレはきっと、わさびの利いていない寿司のようなものだろう。私はその日の夕食のメニューを変更することにした。

イタロ・カルヴィーノが編纂した『イタリア民話集』(*Fiabe italiane*)のなかに、妊婦が魔女の畑のパセリ(*prezzemolo*)を無断で食べたことが発端となる話がある。フィレンツェの「プレツツェモリーナ(パセリ娘)」(*Prezzemolina*)と、ヴェネツィアの「まっぶたつの男の子」(*Il dimezzato*)である。パセリを妊婦に勝手に食べられた魔女たち(Fate)が成長した女の子を連れ去るのが前者、後者の魔女(*strega*)は、生まれた子が7歳になったら半分は自分のものだと主張して、男の子の体をまっぶたつにしてしまうのだ。



【いわゆる、イタリアンパセリ(学名 *Petroselinum neapolitanum*)】

どちらの話も、妊婦が無性にパセリを食べたくなるのである。かつて、パセリは墮胎薬として用いられていたともいわれる。ネット上の『妊娠百科事典』(aoiki.sunnyday.jp)にも、「子宮刺激作用があるので、多量摂取は控えたほうがよい」とあった。妊婦は胎児に悪影響を及ぼすかもしれないパセリを食べすぎてはいけない。このような民間療法の智慧が、子供を連れ去る魔女の話と結びついたのだろうか。

バジリコとパセリを屋外に置いたプランターで育てると、バジリコの葉はすぐに虫に食われるのにたいし、パセリはまったく虫の被害を受けない。パセリが虫除けになると聞いたこともある。

「プレッツェモリーナ」に類似した民話は、ヨーロッパじゅうに流布しており、17世紀の説話集『ペンタメロン(五日物語)』にすでに収められている。「ペトロシネツラ(パセリ娘)」(*Petrosinella*)と題された一篇がそれである(*petrosello* は *prezzemolo* の古形)。ジャンバティスタ・バジーレによって古いナポリ語で書かれたこの説話集の枠組みは(1925年に出版された、哲学者のベネデット・クローチェによるイタリア語訳がこの作品を現代によみがえらせた)、ボッカッチョの『デカメロン(十日物語)』に着想を得たものである。

『グリム童話集』の「ラプンツェル」も、この系譜に属する。もっとも、妊婦が食べなくなる魔女の作物は、パセリではなく、ラプンツェル、すなわち、「野ぢしゃ」なのだ。

オミナエシ科の野ぢしゃは、サラダとして食用に供される。『グリム童話集』の「ラプンツェル」を読んでみよう。

昔、ある夫婦が念願の子供を授かる。妊娠中の妻は、裏の魔女の畑に植えられた野ぢしゃ(ラプンツェル)をどうしても食べたい。夫は野ぢしゃを摘んでいるところを魔女に見つかる。魔女はそれを許すかわりに、生まれてくる子供をもらいうける約束を夫と交わす。魔女は生まれた子供をラプンツェルと名づけて連れ帰り、12歳になると、森のなかの塔に彼女を閉じこめるのだ。

制御不能に陥ったプロメテウスの火によってパセリが汚染された今だからこそ、「プレッツェモリーナ」と一連の民話がなおさら深い意味をもつと思われるのは、パセリという植物が、人間の妊

娠・出産という営みになんらかの影響を及ぼし、なんらかのかたちでかかわっている点である。カルヴィーノは、『イタリア民話集』に付した解説「民話を求める旅」のなかで、民話の本質のひとつが、「人、動物、草、物、すべての一体性と、存在するものすべてが無限に変容する可能性」にあると指摘していた。「プレッツェモリーナ」と一連の民話においても、根源的な人間と自然の関係——カルヴィーノのいう万物の一体性が示唆されているように思われる。

カルヴィーノが1972年に発表した『見えない都市』(*Le città invisibili*、米川良夫訳、河出文庫)は、ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロがフビライ汗に語る55の幻想都市の報告と、その報告をめぐるふたりの会話から成っている。いずれの都市にも、女性の名前がつけられている。



【『見えない都市』(*Le città invisibili*)】

深い地底の湖の上に建ち、千の井戸をそなえるイザウラ。運河に多種多様な橋のかかるフィッリデ。水道管のジャングルのような町、アルミツラ。ここでは、宙吊りにされたシャワーの下で、水の精ニンフが水浴びをしている。このように、マルコ・ポーロの出身地、水の都ヴェネツィアの残像を宿す都市がある一方で、冥界を連想させるような都市もある。空気の代わりに土がある都市、アルジーアでは、道は完全に埋められ、室内は天井まで粘土がつまっている。アデルマでは、マルコの知っている死者たちが、次々と姿を現わす。

レオーニアは、大量に排出される廃棄物によって拡大してゆく都市である。ゴミの内容は、つぶ

れた歯磨き粉のチューブ、切れた電球、古新聞、湯沸かし器、百科事典など雑多。ゴミ収集員は毎日城外へ大量のゴミを運び出さねばならない。毎年、都市はゴミによって外周を拡大してゆく。

レオーニアのゴミは、少しずつ世界を覆ってゆくでしょう、そのはてしないゴミの山へ、最果ての尾根の向こう側から、同じように、廃棄物の山を押し戻している他の都市のゴミの山が押し返してこないのなら。おそらく、レオーニアの境界線のかなたでは、世界全体がいくつものゴミの噴火口で覆われているのでしょう。どの噴火口にも、中央に、たえず噴火する大都市がひとつあるのです (Italo Calvino, *Le città invisibili*, Oscar Mondadori, 2011, p. 112)。

カルヴィーノは、自著『見えない都市』について、次のように語っていた。

今日、自然環境の破壊が、さかんに話題にのぼる。故障の連鎖を起こすことによって大都市全体を麻痺させる巨大な技術システムの脆さにつ

いても同様である。あまりにも巨大な都市の危機は、自然の危機のもうひとつの側面である。世界を覆いつつある均一で連続する都市、「巨大都市」のイメージは、私の本をも支配している (Italo Calvino, *Presentazione a Le città invisibili*, op.cit., p. IX)。

カルヴィーノが、ゴミをテーマに短篇 (『サン・ジヨヴァンニの道』所収の「公認のゴミ箱」) を書くほど、この問題に関心を寄せていたことは、第3回の連載で書いた。

福島原発事故のあとに、レオーニアの記述を読むと、この都市のゴミが、ゴミのなかで最も始末に終えない物騒なゴミ、すなわち、使用済み核燃料に思えてならない。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

… 会館 だ よ り …

イタリア語検定 直前講習会

10月2日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項やひっかけやすいポイントを指導します。

・日時: 9月19日(月・祝)

①5級向け: 10:30~12:00

②4級向け: 13:00~14:30

③3級向け: 15:00~16:30

④3級作文模試: 16:30~17:00

・費用: 2科目 一般・受講生 3,000円
維持会員 1,500円

1科目 一般・受講生 2,000円

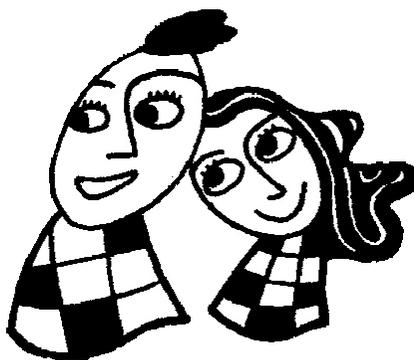
維持会員 1,000円

※3級作文模試は別途1,000円で、

3級向け対策受講者のみオプショ

ンとして受講可

・会場: 日本イタリア京都會館 本校
同 大阪梅田校



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都會館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>